

No. 110

June 1995

甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

神奈川県愛川町で発見されたムサシナガゴミムシの雌雄モザイク型*

笠原須磨生†・苅部治紀‡

昆虫類にみられる異常のひとつに雌雄モザイク現象(gynandromorphism)があり、種々なグループの昆虫に知られているようだが(平嶋, 1991, pp. 42-44), 両性の形態や色彩斑紋の相違が顕著な種類、たとえば、クワガタムシ類や蝶類のそれが目立つために、稀に報告されることがある。しかし、オサムシ科甲虫ではきわめて稀のようで、とくにナガゴミムシ類における事例は、少なくとも、わが国では知られていないであろう。筆者の一人苅部は、1994年の秋に、神奈川県愛川町における自然環境調査の際に採集した数頭のムサシナガゴミムシ *Pterostichus musashiensis* KASAHARA (1993, pp. 341-345) の中に、一頭の雌雄モザイク型(gynandromorph)を見いだしたので、ここに記載しておく。

なお、本種は、関東地方の主として南西部の低山地や山麓部にみられ、神奈川県では藤野町産が基準標本に加えられているので、愛川町における記録は県内2例目となる。

ムサシナガゴミムシ雌雄モザイク型 *Pterostichus musashiensis* KASAHARA [gynandromorph]
(図1, 2a, 3, 4a)

体長(上唇前縁から翅端まで) 17.0 mm; 体幅 6.6 mm. 黒色で光沢が強く、特徴的な短軀中高の外形は、おおむね正常型と異なる(図1)。右触角は柄節を残すのみなので、正確に比較し得ないが、本種の触角は、通常は雄の方がやや長く、愛川町産正常個体雌雄のそれらと比較すると、雌雄モザイク型の左触角は雄性とおもわれる。

前脚付節は、左が雄性(図3a)、右が雌性(図3b)。ただし、雄性の左付節は不完全で、正常型よ

りも幅が狭く、下面のクサビラ状粘着毛も2~3節の内側にのみ生じ、発達も悪い。正常型雄では、1~3節に2列のよく発達した粘着毛をもつ。

正常な本種の腹板末端節は、雄では中央部が台形に深くくぼみ、後縁に大きな斜めの突起があって、その両側が深く湾入し、両側に各1刺毛がある(図2b)。雌では横長に浅く圧下され、後縁は単純で両側に各2刺毛がある(図2c)。愛川町産雌雄モザイク型のそれは(図2a)、横長に浅く

圧下され、左側(腹面から見て右側)に痕跡的な小突起があり、その外側が湾入して1刺毛を有し、不完全ながら雄性形質をあらわす。これに対して右側(腹から見て左側)半分は単純で2刺毛を有し、完全な雌性形質をあらわしている。

体内構造は、残念ながら不注意な扱いにより破損が著しいので詳細を記述し得ないが、ほぼ完全な雌交尾器の先端部、すなわち1対の半腹板(hemisternite)と尾突起(stylus)が認められる。しかし、正常型のそれ(図4b)に比較すると、明らかに萎縮が認められ、小さい(図4a)。さらに奇異なことに、もう1対の雌交尾器先端部を内在し、これも同様に萎縮している。

以上の所見から、愛川町産雌雄モザイク型個体は、左側に不完全ながら雄性形質を、右側に雌性形質を具現する。しかし、上翅が幅広い雌のそれに近く、雌交尾器を(2対!)有することから、完全な左右の雌雄モザイクというよりも、雌性形質のまさった異常個体と考えられる。

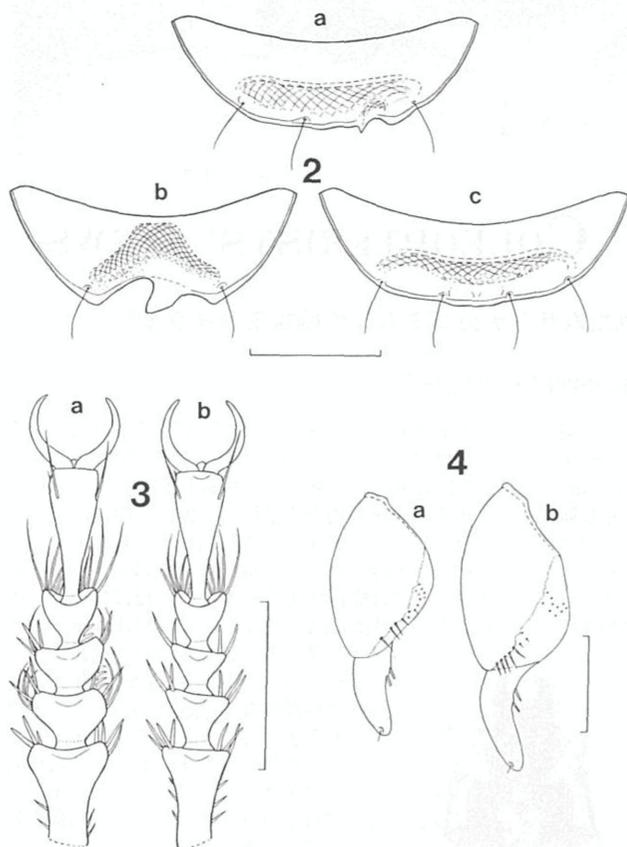
被検標本: 1頭, 神奈川県愛川町経ヶ岳, 15. X. 1994. 苅部治紀採集。



図1. ムサシナガゴミムシ雌雄モザイク型 *Pterostichus musashiensis* KASAHARA [gynandromorph], 神奈川県愛川町経ヶ岳産。

* KASAHARA, S., & H. KARUBE: Occurrence of a gynandromorph of *Pterostichus musashiensis* (Carabidae) in Kanagawa Prefecture.

† 千葉県船橋市. ‡ 神奈川県立博物館(自然系)



本個体が採集された愛川町の経ヶ岳 (標高 630 m) は、神奈川県中北部の中津川沿いに位置し、中腹まで広くスギ植林に覆われているが、山頂部に広葉樹の二次林が残されている。ムサシナゴミムシは、山頂に至る尾根の登山道沿いで採集されたが、雌雄モザイク型個体のみは、林道を横切る沢の源頭部 (標高 530 m) で、ジュンサイナゴミムシ、タンザワナゴミムシ、ハラトゲナゴミムシ等と共にベイトトラップで採集された。

図2-4. ムサシナゴミムシ *Pterostichus musashiensis* KASAHARA, 神奈川県愛川町経ヶ岳産—2, 腹板末端節: a, 雌雄モザイク型; b, 正常型雄; c, 正常型雌。スケール 2 mm。3, 雌雄モザイク型前脚付節: a, 左; b, 右。スケール 1 mm。4, 雌交尾器左半腹板内片と尾突起: a, 雌雄モザイク型; b, 正常型。スケール 0.5 mm。

参考文献

- 馬場金太郎・平嶋義宏 (編著), 1991. 昆虫採集学, xvi+660 pp. 九州大学出版会, 福岡。
- KASAHARA, S., 1993. Two new pterostichine carabid beetles found on low mountains in central Honshu, Japan. *Elytra*, Tokyo, 21: 337-345.

○エカシマルトゲムシの学名について

エカシマルトゲムシは北海道に特産するマルトゲムシで、日本産 *Byrrhus* 属の最大種である。♂は同属他種のその2倍近い巨大な交尾器を持つことにより、他種から容易に区別される。道内では基産地の札幌の他、大雪山地、日高山脈等に分布し、特に日高山脈では比較的普通に見られ、各地の採集目録にしばしば収録されている。

本種の学名は図鑑 (上野ほか, 1985), 属のレビジョン (TAKIZAWA & NAKANE, 1977), 日本産昆虫総目録の全てにおいて "*Byrrhus ekashii* KÔNO" と表記されており、各地の採集記録もこれに従っている。ところが、KÔNO (1934) の原記載を調べたところ、本種の学名は "*Byrrhus ekashi*" と表記されていることが判明した。下に図示したのはその初出箇所

Byrrhus ekashi n. sp.

♂. Körper plump, verkehrt eiförmig. Grundfarbe rostrot bis schwarz; Fühler rotbraun, zur Spitze hin verdunkelt. Oberseite vorwiegend dicht braun behaart, zum Teil goldgelb tomentiert, Halsschild und Flügeldecken teilweise mit schwarzen Tomentflecken, Schildchen ganz schwarz tomentiert, Unterseite und Beine nicht dicht braun behaart.

であり、末尾の摘要でも "*B. ekashi* KÔNO" となっている。従って、本種の学名は "*Byrrhus ekashi* KÔNO" とするべきである。

なお、"*ekashi*" はアイヌ語の普通名詞 (長老) であり個人名ではないから、属格語尾 *-i* がいない方が語感としても自然であろう。

末筆ながら、文献の入手に便宜を図って下さった小杉時規、中谷正彦両氏に心からお礼申しあげる。

参考文献

- 平嶋義宏監修, 1989. 日本産昆虫総目録。
- KÔNO, H., 1934. Zwei neue *Byrrhus*-Arten. *Ins. Mats.*, 8: 129-131.
- TAKIZAWA, H., & T. NAKANE, 1977. *Byrrhus* LINNÉ and *Cytillus* ERICHSON from Japan and its adjacent areas. *Bull. Natn. Sci. Mus., Ser. A (Zool.)*, 3(1): 55-65.
- 上野俊一ほか編, 1985. 原色日本甲虫図鑑. III. 保育社。
- (新潟県南魚沼郡, 芳賀 馨)

ミヤマハナゾウムシ (和名新称) の推定ホスト

堀川 正 美

昨 1994 年に九州大学昆虫学教室の小島弘昭氏と森本 桂教授の共著で日本産ハナゾウムシ亜科をまとめた論文が発表された (ESAKIA, (34): 147-186). *Anthonomus alni* はそこで記載された新種である。記載に付された全形写真は斑紋がやや不鮮明だったが、のちに私が山形県で採集した標本を見た小島弘昭氏から、斑紋が鮮明な個体だから写真を発表するようにとのおすすめがあった。本種は斑紋をなす鱗毛が早く落ちやすいのである。

また、このさい和名をつけるようにのご指示もあって、同氏のご了承をえて、ミヤマハナゾウムシとすることにした。

ミヤマハナゾウムシの斑紋は「前胸は白っぽい鱗毛と褐色がかった鱗毛でおおわれ、白っぽい鱗毛による不明瞭な中央縦縞がある…上翅は白っぽい鱗毛による中央後ろの帯とぼんやりした中央前の帯があり、第3・第5間室には基部・中央・中央後ろに黒斑があって、他の部分は褐色がかった鱗毛をよそおう」(英文)と、記載にあるとおりだが、新鮮な個体であらたにわかった特徴は、上翅第1間室が上記の白・褐2色の交互な斑らになっていること、また中央と中央後ろの黒斑(ないし褐色斑)がさらに側方にもあることである。

この結果、後ろの白帯の前後にやや不連続な黒っぽい横帯があるように見える。加えてハナゾウムシの上翅側方によく見られる囲み模様が、本種にもかなりはっきりと浮かび上がっている。これは山形産6個体にほぼ共通した特徴である。

採集データは次のとおりである。

6頭、山形市西藏王高原、1994年6月15日。赤い実をつけたオオヤマザクラ *Prunus sargentii* にいた。写真はその1♀で体長3.2mm。

場所は西藏王の竜山(瀧山ともいう)の北西登山口付近で、中世の歌人西行法師が出羽の国の山桜の花を詠んだゆかりの地である。オオヤマザクラの高木が自生しているが、西行にちなんで山形市が若木も植栽しており、ミヤマハナゾウムシはこの若木にいた。時間がなくてそれ以上調べられなかったが、本種はもともと自生の木のほうにいたのだろう。

1週間後私は青森でも採集した。

3頭、青森県岩木山、1994年6月22日。若葉が展開中の、赤い小さい実がついたミネザクラ *Prunus nipponica* にいた。上翅の斑紋はすれっから

しで、なくなっている。場所は岩木山外輪山の鳥海山附近である。

ところでミヤマハナゾウムシの種小名が *alni* であるのは、タイプ標本の北海道大千軒岳産のものがハンノキ属 *Alnus* から採集されたことによる。しかし記載の生態ノートによると他のタイプ標本のどれかだろう、ナナカマドから採集されたものもある。

ハナゾウムシ類はホストとしてバラ科の木に依存するものが多い。サクラ属 *Prunus* につく種にオビモンハナゾウムシ *A. rectirostris* がいる。かつてはサクランボ(セイウミザクラ)の害虫として知られたが、オオヤマザクラ、オオシマザクラなどの実に産卵する。神奈川県のオオシマザクラには4月上旬の開花時に早くも出現して花ざかりの花に集まり、6月中旬～下旬になっても少なからずいるが、

この時期になるとオオシマザクラの黒熟した実が地上に散乱して、オビモンハナゾウムシは高い枝から下生えや周囲の低木におりてきてしまう。これは発生が遅くてまだ産卵し終わらない雌たちが主であるようだ。

北海道大千軒岳のばあい、採集されたのは7月下旬の23日と26日であった。ハンノキ属の木(ヤシャブシか?)の近くに、サクラかあるいはナナカマドがあったのではなからうか。

山形と青森の採集例を考え合わせると、ミヤマハナゾウムシの推定ホストとしてバラ科サクラ属ないしナナカマド属を考えると、無理がないように思われてきた。

ホストを確かめるには落ちた実を集めて発生を確認する必要がある。興味を持たれる方に期待してタイプシリーズの産地とそのご追加された産地をまとめておく。

北海道羅臼岳、大千軒岳、青森県岩木山、山形県西藏王高原、福島県猪苗代湖畔、栃木県西那須野町、日光市、長野県軽井沢町、木曾駒ヶ岳、福井県法恩寺山、岐阜県上宝村、高山市、奈良県大台ヶ原山。

採集月は5月から9月にわたっている。標高にもよるがサクラは7月までに落果し、ナナカマドは6月から開花する。類推すれば早い出現がサクラ属に、遅い出現がナナカマド属にのらう。

それからミヤマハナゾウムシは *A. amygdali* が日本で分化した種であるようだ。今のところ私は知らないが *A. amygdali* のホストがわかれば、推定のべ



つな根拠になるかも知れない。

終りに、山形産の標本を同定して頂いた森本 桂教授、写真と知見の発表をすすめられた小島弘昭

氏、写真を撮影して頂いた宮川澄昭氏、福島産の標本を検査する機会を与えられた岩田隆太郎氏に、深謝する。
(神奈川県横浜市)

○チャイロマルバネクワガタ雌雄型の記録

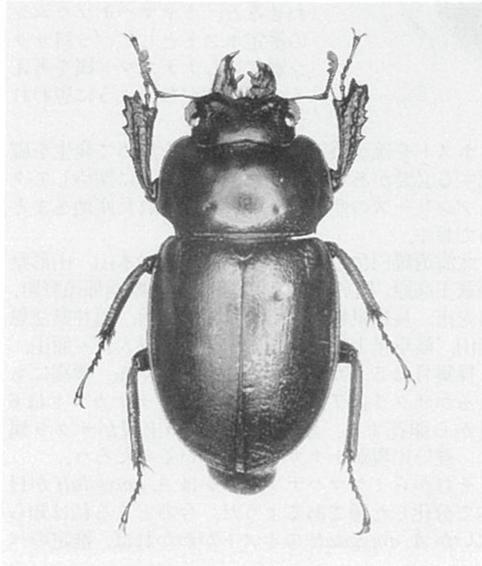
雌雄異型で、二次性徴が顕著なクワガタムシ科甲虫の場合、いわゆる雌雄型とよばれる性モザイク現象は外部形態においても非常に特異で、衆目を惹くものである。筆者らも、下記のように雌雄型を検査する機会を得たので記録しておきたい。貴重な標本を提供していただいた採集者の小林信之氏に、感謝申し上げます。

チャイロマルバネクワガタ *Neolucanus insularis* Miwa, 1929, 1頭(雌雄型)、沖縄県西表島祖納, 14. X. 1981, 小林信之採集。

体長(大顎を含む): 24 mm, 写真からも一見して判るように、特に頭部において、左半分が雄、右半分が雌となっている。最も顕著なのは大顎であるが、他にも眼縁突起の形態、頭部中心線ではっきりと境界をなす表面構造の様子(左の雄側は、非常に微細な点刻が密布され艶消し状、右の雌側は、粗大な点刻が散在し光沢がある)などの諸点に明瞭に雌雄の特徴の違いが見られる。また、左大顎は、体長が同程度の正常な雄と比較すると、いくらか発達が弱いようである。

前脛節は、左右ともに完全に雌のものであるが、中脛節は左に雄の特徴(先端付近に柔毛の束が生え、膨らんで見える)が現れ、長さも僅かに長い。後脛節は左右で差が無く、先端の柔毛束を欠くので、やはり雌のものと言える。付節は短小で、全て雌である。

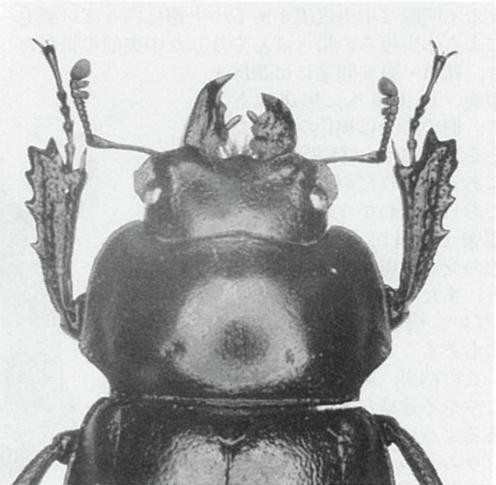
前胸、上翅、体の腹面などは、もともと雌雄の差異が殆ど無い種なので、本個体においても形態的に性モザイクを認める部分は見あたらない。



雌雄型の場合、外見と共に興味が持たれるのは交尾器の構造である。標本は当初より一般の乾燥標本となっていたので、然るべき軟化処理をして腹部全体を慎重に解剖してみたが、通常の雄、または雌の交尾器はもちろん、それらしき器官様のものは一切見出すことができなかった。

以上のように、本個体には雌の体制が基本となり、頭部など左側の一部に雄の要素が入りこんだ様子が窺えるが、生殖器系、及び交尾器は全くと言ってよいほど形成されなかったようである。

日本産クワガタムシ科の雌雄型については、林(1987, 1993)のミヤマクワガタや、尾形(1993)のサキシマヒラタクワガタなどの例があるが、本種については知られていなかったようである。



参考文献

- MAES, J. M., 1981. *Bull. Inst. r. Sci. nat. Belg.*, 53(3): 1-7.
林 長閑, 1987. 日本の昆虫⑧ミヤマクワガタ, 文一総合出版, 東京.
——— 1993. 月刊むし, (274): 4.
尾形篤志, 1993. 同上, (274): 10.

(鎌倉女学院, 境野広行; 川崎市, 川田一之)

○訂正とお詫び

甲虫ニュース 108号5ページ、「瀬戸内地方におけるシロヘリハンミョウの記録」の報告において、採集データの日付が間違っていましたので、ここに訂正してお詫びいたします。

誤: 「12. VI. 1992.」 正: 「12. VII. 1992.」

(倉敷市立自然史博物館, 奥島雄一)

◇『甲虫ニュース』原稿大募集◇

今シーズンの成果はいかがでしょうか。ホットな短報を大募集しています。分布や生態の新知見などの原稿をお送りください。(編集幹事, 妹尾俊男)

○日本未記録種を含む北海道産メダカハネカクシ2種について

筆者の一人加藤が北海道で採集したメダカハネカクシを、直海俊一郎博士に同定していただく機会があり、その結果、1種は日本未記録、もう1種は北海道未記録であることが分かったので、新分布として報告しておく。

1. *Stenus biguttatus* (LINNAEUS)

1頭、端野町忠志常呂川河川敷、5. IX. 1989; 3頭、端野町川向、21. IX. 1992; 2頭、訓子府町穂波、29. IX. 1992; 2頭、置戸町勝山、21. VIII. 1992; 1頭、北見市上常呂常呂川河川敷、8. IX. 1989.

本種は日本新記録種である。本種は、*S. szechuanus* PUTHZ に似るが第3および第4腹側板の主点刻列のそばに数個の点刻があることで区別される。また、交尾器の形状も異なる。これまでの分布の東限はアルタイ山脈付近である (PUTHZ, 1981).

2. *Stenus rugipennis* SHARP

2頭、19. VIII. 1992; 2頭、21. VIII. 1992; 4頭、21. VIII. 1992、全て置戸町中里墓地の沢川河川敷。北海道新記録。

標本の同定をしていただき、発表を勧められた直海博士と、文献の入手に便宜を計って頂いた堀繁久氏に感謝する次第である。

文 献

PUTHZ, V., 1981. *Fragm. Coleopt.*, (29/32): 115-124.

(北海道江別市、宮下公範; 北見市、加藤敏行)

○オオクラヒゲナガハムシの食草と新産地について

オオクラヒゲナガハムシ *Galerucella ohkurai* KIMOTO et TAKAHASHI は、岩手県早池峰山から1992年に記載された種であるが、食草についての報告がなかった。やや古い記録だが、筆者らは、早池峰山高山帯の蛇紋岩地帯において、当地に特産するナンブトウチソウ *Sanguisorba obtusa* MAXIM を後食している本種を観察しているので、報告しておく。筆者の一人鎌倉が1992年7月11日に早池峰に登山したときは、この植物の葉上で本種の姿がよく見られたが、国定公園の特別保護地区内であることから標本は残していなかった。

その後高橋は、奥羽山地の栗駒山から本種を採集した。栗駒山では、東北地方の山地に広く分布しているシロバナトウチソウ *Sanguisorba albiflora* MAKINO の葉上で得られた。ここでは、幼虫と思われるものも成虫と同程度の数が見られ、その葉を摂食していた。なお早池峰山でも、低標高のコメガモリ沢付近ではシロバナのみが自生し、本種が得られていることから、これも食草になっている可能性が高い。

以上のことから、本種が *Sanguisorba* 属を host としていることはほぼ間違いないと思われる。特に、シロバナトウチソウに注意することによって、さらに多くの産地が発見されることが期待される。

採集記録

岩手県一関市栗駒山筑森 (alt. 1,300 m), 18頭, 23. VIII. 1992, 高橋泰美採集。

交尾中のオオクラヒゲナガハムシ (上) および本種の食痕 (下)。

(早池峰山にて, 11. VII. 1992. 鎌倉撮影)



参考文献

KIMOTO S., & Y. TAKAHASHI, 1992. Description of a new species of Galerucinae (Chrysomelidae, Col.) from Japan. *Ent. Rev. Japan, Osaka*, 47(2): 99-101.

木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説, p. 148, 東海大学出版会, 東京.

(山梨県韭崎市, 鎌倉正人; 岩手県水沢市, 高橋泰美)

○ナガキマワリ類2種の分布記録

ハネナシセスジキマワリ *Strongylium marseuli* LEWIS とセスジナガキマワリ *S. Cultellatum* MÄKLIN の日本および周辺地域の分布については今坂 (1985) の報告があり、その後秋田 (1987) によりセスジナガキマワリの鹿児島市とトカラ悪石島からの記録が追加された。

筆者の手元から上記報告に未記録の場所で採集された標本を見出したので新たな分布地として報告する。

1. ハネナシセスジキマワリ

1頭、沖縄本島与那覇岳, 17. VII. 1973, 酒井 香

採集.

2. セスジナガキマワリ

1 頭, 屋久島楠川, 7. VII. 1971, Y. IMAMURA 採集.

ハネナシセスジキマワリの現在までの南限記録は屋久島であり, これで奄美諸島を飛び越えて一挙に沖縄本島にまで分布域が広がったことになる. セスジナガキマワリの方は九州本土とトカラ列島の間の空白を埋める記録になる.

また, 今坂の報告では両種の混棲地は対馬1ヶ所のみであったが今回の報告により屋久島, 沖縄本島を加えて3ヶ所となった.

最後ではあるが, 貴重な標本を恵与していただいた酒井 香氏に厚くお礼申し上げる.

引用文献

今坂正一, 1985. ハネナシセスジキマワリとセスジナガキマワリについて. 月刊むし, (172): 23-25.

秋田勝己, 1987. 鹿児島市とトカラ悪石島でセスジナガキマワリを採集. 月刊むし, (196): 41.

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

○ニホンミズギワコメツキの腹部気門の形態

コメツキムシ類の成虫の腹部気門の形態については, 今まで殆ど調べられていないと思われる. 筆者はニホンミズギワコメツキ (*Fleutiauxellus niponensis*) の腹部気門の形態について調査したので, ここに報告する.

本科の腹部気門の開閉部は, 一般に周辺の表皮面からやや盛り上がった円形または楕円形状をしており, 内部の気室 (atrium) には複雑に分枝したブラシ状突起物 (brush-like process) を多数生じ, 属また近似種間ではそれぞれ類似性が認められる.

ここに示したのは, ニホンミズギワコメツキの第3~5 腹節あたりに開口する気門の一つである. 開口部は, 周辺からやや盛り上がった縁取りのない円形 (図は斜め側方から見ているため楕円形状をして



いる) で, 気室には小数のひだ (図の↑印) があり, このひだから分枝の不完全な突起物を小教生じている程度で, ブラシ状突起物は極めて貧弱である. また, 本属の種は水辺の砂礫中に生息するものが多いので, 気門や気室に水適応のような構造があるのではないかと思っていたが, ここで観察した限りではそのような形態は見出されなかった. しかし, 気室にひだ状のものが生ずる例は稀で, もしかしたらこれがその役割をしているのかも知れない. また, 同属のミズギワコメツキ (*F. curatus*) も調査したが, 気室の形態などは本種によく類似していた. 図の気門の直径は 0.025~0.03 mm 程度である.

(愛知県岡崎市, 大平仁夫)

○レロフコブコブゾウムシ四国に産す

コブコブゾウムシ属 *Styanax* は, 以前は東洋区マレー亜区およびインドシナ亜区に分布する種から構成されていた. CHŪJŌ & VOSS (1960) は, ROELOFS によって *Scaphosternus* 属の種として日本から記録された *scrobiculatus*, *rugosus* の両種を *Styanax* に移すとともに, 佐渡から新種 *kuwanoi* を記載し, さらに *Styanax* を模式属としてコブコブゾウムシ亜科 *Styanacinae* を設立した.



このようにコブコブゾウムシ属に属するゾウムシは日本から3種知られているが, そのいずれも四国からは記録されていない. 筆者は, 徳島県の真野俊作氏から, 同県下で採集された本属の種の標本を恵与いただいたが, 既知3種の差異が微妙であるため, 記録するに到らなかった.

今回, この標本を森本 桂教授に同定していただき, レロフコブコブゾウムシ *Styanax scrobiculatus* (ROELOFS) であるのご教示をいただいたので, 記録しておきたい.

4 頭, 徳島県麻植郡鴨島町 (西麻植療養所構内の神社), 5. VIII. 1989, 真野俊作採集. 3 頭は森本桂同定, 九州大学所蔵, 1 頭は筆者保管.

採集地点の病院は元の結核療養所で, 構内には戦前からのシイ自然林が残されている. 採集された個体は全て, 夜間にその中の1本のシイの倒木の樹幹から見出されたという.

末筆ながら, 標本を恵与された真野俊作氏, 同定

を賜った森本 桂教授、文献の入手に便宜を図って下さった上野輝久氏に心からお礼申しあげる。

参考文献

- CHŪJŌ, M., & E., Voss, 1960. Neue Curculioniden-Subfamilie, -Gattungen und -Arten von Japan. *Mem. Fac. Liberal Arts & Educ. Kagawa Univ. Part II.* (94): 1-17.
- 平嶋義宏監修, 1989. 日本産昆虫総目録 I. 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター。

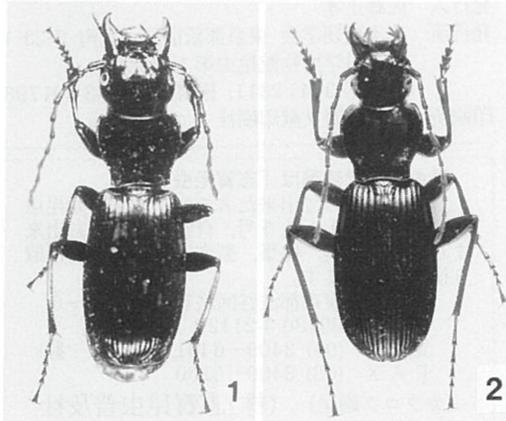
(新潟県南魚沼郡, 芳賀 馨)

○岡山県中部の鍾乳穴から採集されたナガゴミムシ 2種の記録

筆者は昨年 8 月, 岡山県新見市満奇洞に近い秘坂鍾乳穴(ひめさかかなちあな)を訪れた際, 洞口付近の石起こしで *Pterostichus* 属のゴミムシを得た。これを検したところ, ダイセンナガゴミムシ *Pterostichus fujimurai* HABU, 1958 であることが確認されたのでここに報告する。この個体は, 基産地である大山の個体に比べ, 体が平たく, 外観上強壯さを欠き, 体色もやや薄い。また, 上翅側縁はより並行に近く, 触角の微毛は第 3 節先端において大山産の個体のそれよりやや密であり, 付節背面の溝は第 2, 第 3 節において顕著であった。雄腹端節の突起は先端がより丸みを帯び大山産個体とは若干異なっているが, 雄交尾器の形状については目立った差異は認められなかった。本種に近縁のナンキナガゴミムシ *P. shotaroi* MORITA, 1987 の記載とも比較してみたが, 雄交尾器陰茎末端がフック状となっていないことなどにより区別できた。また, 同地では奥島氏によってキイオオナガゴミムシ *P. pseudopachinus* NAKANE と考えられる種も採集されているのでこの個体についても加えて報告しておく。

図 1. *Pterostichus fujimurai* HABU, 1♂, 岡山県新見市秘坂鍾乳穴, 8. VIII. 1994, 佐藤陽路樹採集・保管。

図 2. *Pterostichus pseudopachinus* NAKANE, 1♂, 岡山県新見市秘坂鍾乳穴, 10. VII. 1994, 奥島雄一採集(倉敷市立自然史博物館に保管)。



この洞窟の洞口が位置するドリーネ底部の気温は上部に比べ 15°C 程低くなっており, 当年夏期の異常渇水にも関わらず湿潤であった。なお, 上記 2 種と共に同時にアテナガチビゴミムシ *Trechiana yokoyamai ishikawai* S. UÉNO が多数採集でき, 石起こしの最中には当地では記録の少ないガロアムシも見ることが出来た。

末筆になるが, 今回の採集にあたり, 何かと便宜を計って下さった倉敷市立自然史博物館学芸員の奥島雄一氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

- HABU, A., 1958. Three new species of the genus *Pterostichus* from Japan (Coleoptera, Carabidae). *Kontyû, Tokyo*, 26: 68-75.
- NAKANE, T., 1979. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. 30. *Rept. Fac. Sci., Kagoshima Univ., (Earth Sci. & Biol.)*, (12): 51-60.
- 中根猛彦, 1979. 日本の甲虫, (58). *昆虫と自然*, 14(11): 2-4.
- TANAKA, K., 1958. A new subgenus and two new species of the genus *Pterostichus* from Japan (Coleoptera, Carabidae). *Kontyû, Tokyo*, 26: 78-83.
- 田中和夫, 1985. ナガゴミムシ亜科. 上野俊一, 黒沢良彦, 佐藤正孝編著, 原色日本甲虫図鑑 (II), pp. 120-121, 22 pls. 保育社, 大阪.
- UÉNO, S.-I., 1958. The cave trechids from the central part of the Chûgoku District, Japan. II. *Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, (B)*, 25: 185-197.

(東京農大, 佐藤陽路樹)

○『ソ連極東の昆虫の分類』の編著者名について

ロシア科学アカデミー極東支部生物学・土壌学研究所から刊行されつつある *Opredelitel' Nasekom-ykh Dal'nego Vostoka SSSR* 第 3 巻(現在までに第 1・第 2 分冊を刊行)は, *Elytra* 誌上の書評でも紹介されたとおり, 日本の甲虫を研究するためにも必読の重要文献である。全文がロシア語という障害にもかかわらず徐々に引用回数も増えているのは喜ばしい限りだが, 筆者が見た全ての引用例において, 編著者の姓が誤って引用されている。第 2 分冊の刊行後 2 年以上たつたが, 本学会を指導される先生方のご指摘が未だにないので, 僭越ではあるが指摘しておきたい。

結論として, 上記文献の編著者名は, P. A. LERA ではなく, P. A. LER である。

同書の扉の中央には“LERA”(原文はロシア文字, 以下同じ)と印刷されているが, これは上の“Tom III”から続いてくる句の末尾の語で, 生格(所有格)形である。主格形はその次の頁に印刷されているとおり, “LER”である。

P. A. LER がどのような人か浅学にして知らないが, ロシア人の姓としては例外的な非形容詞型であるので, ロシア以外の民族を先祖とする人であろうと思われる。

(新潟県南魚沼郡, 芳賀 馨)

関口俊雄画伯を悼む

去る2月4日、会員の関口俊雄氏が84歳の天寿をもって逝去された。氏は北海道札幌のご出身で、わが国における昆虫画の草分けの御一人である。北海道大学松村松年教室以来の盟友であった玉貫光一氏と1970年に上梓した大冊「世界の甲虫」の見事なイラストをご記憶の方も多であろう。氏は甲虫類の愛好家でもあり、報文こそ残されなかったが、甲虫談話会に引き続き日本鞘翅学会に在籍され、会誌を楽しみにしておられた。

ここに、関口画伯の永年にわたる画業のうちから、私の手元にある幾つかを挙げて追悼の小文にかえようと思う。

初期のものでは、横山桐郎著「日本の甲蟲」正(1930)、続(1931)のカラープレートがあり、横山博士の序文に「……水島南平氏及び新進の関口俊雄君とに写生を依頼し、……此兩名の画家に依って畫かれた畫は実に眞に迫ったもので……」とある。また、1936年の「第一次滿蒙學術調査研究團報告」の「熱河省産昆蟲類 [VI] 鞘翅目 (I)」に、ハネカクシとマドボタルの美しい原色図がある。戦後は、風土病や寄生虫の研究をしていた米軍406部隊でダニ類の精緻な図を描かれているが、生前に伺うと、この件に関しては何故か黙して語られなかった。

私が関口氏の原画に初めて接したのは、北隆館の「原色昆虫大図鑑」II (1963)、III (1965)で、とくに、コバチ類の8プレート、150余種に及ぶ見事な彩色画に感嘆したものである。

児童向けの学習図鑑や百科事典の全盛時には、学研 (1970, 1980)、講談社 (1975)をはじめ多くの出版物に彩筆をふるわれた。いずれも子供向けといえど手抜きのない正確な図で、一見して画伯の筆になると思われるものばかりである。

学術書では、Fauna Japonicaの土生襖申博士による一連のモノグラフ、コバチ類 (1962)、アトキリゴミムシ類 (1967)、ゴモクムシ類 (1973)、ヒラタゴミムシ類 (1978)の原色図版を挙げられよう。また、1964年から20年以上にわたって、上野俊一博士の主としてチビゴミムシ類の記載論文の全形図を担当され、総数100余種に及ぶ。

晩年、東京銀座の画廊が主催した生物画展に出席したアゲハチョウの生態画が、「月刊むし」200号記念号の表紙を飾り、画伯も喜ばれたことであった。また、先ほど同誌3月号の表紙に遺作の一点が追悼の意をこめて掲げられた。

関口画伯は寡黙の人で、みずからを語ることなく、同業画家との交流も少なかったようで、弧高の職匠として生涯をまっとうされた。今年も年賀状を頂き、御元気のことと喜んでいたのだが、突然の訃に接し残念でならない。慎しんでご冥福をお祈り申しあげる。(笠原須磨生)

◇第19回名古屋支部大会の記◇

1995年3月12日午後1時30分から愛知県産業貿易館で開催された。

佐藤正孝氏「海南島を訪ねて」

氏は数人の経済視察団の人々に混じって、中国の海南島を旅行された。中国側は日本からの視察ということで、町の一流ホテルが用意され、開かれた地域を見せられ、どうぞ投資をして下さいと言わんばかりだった。ですから採集の機会は僅かだった。その上に採集向きの地域は保護区が多かった。

続いて休憩と一人一話を行なった。供覧標本も多く、興味深い話も多かった。

大沢省三氏「日本のオサムシのDNA鑑定」

氏はミトコンドリアDNAを調べてのオサムシ亜科の高位分類の話であり、大体において石川良輔氏の分類に近い。将来は中国やシベリアなどの材料を入手して、日本産とのつながりを追及したいと。次にはネクイハムシを大阪市立自然史博物館の人々と実施したいとの希望である。

出席者氏名：青木哲、秋田勝巳、伊沢和義、石田勝義、岩崎博、井村有希、大沢省三、河路掛吾、蟹江昇、川瀬英夫、桐山功、久保田耕平、岸隆泰、佐々治寛之、佐藤正孝、斎藤孝夫、斎藤昌弘、榊原達也、坂上光一、清水清市、志水基彦、高井泰、遠山雅夫、生川展行、野中勝、野平照雄、穂積俊文、村松稔、森田誠司、吉富博之(穂積記)



日本鞘翅学会

会費 (一カ年) 6,000円、次号は1995年9月下旬

発行予定

発行人 佐藤正孝

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館昆虫第1研究室

電話 (3364) 2311、振替 00180-3-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社